



Philo 訪問看護のフィロソフィー KAEDENOKAZE × Carepro “Philosophy” sophy

楓の風とCareproが考える訪問看護

“Philosophy”

フィロソフィー

=哲学、大切にしていること、価値観や倫理観、など。



2016年12月から楓の風とケアプロは、
訪問看護のフィロソフィーとは何か？
について事例検討を重ねてきました。

その中で、訪問看護のフィロソフィーは多様かつ複雑であり、
抽象化できないことが分かりました。
そしてそれが訪問看護の醍醐味でもあると考えました。

今回、訪問看護の実例を通して、
訪問看護のフィロソフィーを感じていただけましたら幸いです。

Contents

1	訪問看護のストーリー	04
2	訪問看護のフィロソフィー	12
3	座談会 “KAEDENOKAZE × Carepro”	14
4	働くスタッフの特徴	16
5	会社概要	18

STORY 1

1. 訪問看護のストーリー

大切なことを大切にしたい

KAEDENOKAZE × Carepro “STORY”

40代の明子さんは、乳がんの進行により予後1ヶ月となり、婚約者と住んでいた家に戻ってきました。私が初めてお伺いすると、エスニック柄のこだわりのクッションやカーテンのある1LDKのアパートのダブルベッドの上に、凜とした表情をうかべ横になっていました。寄り添っている婚約者の彼は、彼女より少し若く見え、シャイな印象でした。

明子さんは、20年近く一生懸命治療を続けたこと、彼と一緒に住んでいたこの家に戻る決心を二人でしたことを、少し息を切らしながら話してくれました。

お体の様子を見せただくと、左胸部は自壊してお

り、胸水も溜まりはじめ呼吸状態の悪化が近いうちに來ることや体力の低下により起き上がりが辛くなるのが容易に予測できました。少しでも楽に過ごせるようにと、電動介護ベッドの導入を提案し、翌日には搬入できる手続きを取りました。

私が退室した後、彼から訪問看護ステーションに電話がかかってきました。内容は、「やっぱり電動介護ベッドは必要ない、部屋に入れたくない」とのことでした。私は、お二人が、病状の進行やこれから起こる体の変化を受け入れられていないのではないかと心配になりました。

次の日、改めてお二人に話を伺ってみました。今使っているダブルベッドは、お二人でお金を貯めて買ったこと、ダブルベッドの上で彼の隣で眠りながら死にたいと思っていることなど、ダブルベッドへの思いを話してくれました。

それを聞いた私は、お二人の思い入れのあるダブルベッドで、明子さんと彼が最期のひとときを過ごすという「望み」を叶え、その上で、病状の進行を予測しながら生活を工夫し、できる限り安楽に、幸せに暮らせる方法を見つけながら全力で支援していくことが、私ができる「看護」だと確信しました。

それから、私達は毎日訪問し、希望や体調に応じた清潔ケアや疼痛コントロールのための麻薬調整をしました。時には、彼がギターを弾いてくださり、穏やかな時間を過ごせました。

1ヶ月ほどして徐々に呼吸困難感がでてきましたが、ベッドの周りにお気に入りのクッションやぬいぐるみでギャッジアップするようにポジショニングをしたことで、和らげることが出来ました。

お二人は最期まで、今までの生活や互いの存在を意識しながら過ごされました。

ある日の朝、訪問するとすでに下顎呼吸が始まっていました。彼は明子さんの手を握りしめ、優しく彼女を見つめていました。その後程なくして、明子さんは、ダブルベッドでいつもの安らかな寝顔のまま、彼に見つめられる中息を引き取られました。



STORY 2

1. 訪問看護のストーリー

むちゃぶりの真意

KAEDENOKAZE × Carepro “STORY”

僕は4年間の病棟経験を経て、訪問看護ステーションで働き始めました。

入職して3ヶ月が経った頃、所長から「肺がん末期の独居の男性で、こだわりが強く気難しい人という情報がある方がいるが、担当になってみないか」と言われました。僕は少し迷いましたが、何事も挑戦だと思い引き受けました。

初めてご自宅に伺うと、鈴木さんはベッドでテレビを見て過ごされていました。挨拶後に主訴を伺うと「お腹を押すと痛みが良くなるんだ」「20kgの砲丸を用意してくれ。そしたら自分でお腹の上でゴロゴロできるから」と

腹痛を訴えていました。その場では、「医師に意見を聞いて、大丈夫なら砲丸を探してきますね」とお伝えしましたが、内心では「何とかしてあげたいけど、むちゃぶりだな」と思いました。

翌日から訪問する度に、ヘルパーへの不満や無茶な要求、訴えが二転三転する様子や、気に入らないと声を荒げるなどの様子があり、僕は徐々に疲れを感じました。

一方鈴木さんの腹痛は麻薬を使用しても改善はなく、腹部を圧迫すると楽になる状況は続いていました。僕はどうにかしてあげたいと思い主治医に相談しました。

KAEDENOKAZE × Carepro “STORY”

10kgくらいの重さならいいと許可をもらい、他のスタッフとも相談し、調理用のボールの中に肥料を入れ、2つ重ねて球体にしたものを作ってみました。早速持っていくと、「もうお腹は大丈夫になった。無駄になっちゃったね」と、鈴木さんはいつもの険しい表情ではなくちょっぴり申し訳なさそうに言いました。僕は残念に思いましたが、なんだか鈴木さんに近づけた感じがしました。

その後、痛みは日ごとに強くなり、「入院したくない」「入院したほうがいいのか」と鈴木さんの気持ちが揺れ動いていました。葛藤している姿を見て、一人で生きてきた鈴木さんだからこそ、きちんと意思を確認すべきだと思いました。

「最期はどうしたいですか」

鈴木さんは、まっすぐ僕の方を向き、「よくわからなくなったけど、でもこのままが良い」としっかりした口調で話されました。僕は、自宅で最期まで過ごす覚悟を決めた鈴木さんを支えていこうと決意しました。

それから最期の時までには約2週間程でしたが、毎日訪問をして、希望に応じてケアを行いました。この頃は、以前のように声を荒げるようなことはなく、部屋には穏やかな空気が流れていました。出来る事は徐々に減り、ただ体をさすり一緒にいるだけの時間も多くなっていきました。

ある日のケア終了後、明日にはお亡くなりになられていると思い『お疲れ様でした』と心の中でご挨拶をしました。その翌朝訪問すると、鈴木さんは最期の呼吸を終えておられました。

悩むことも多かったのですが、むちゃぶりと思うのではなく、利用者さんの言葉の真意を考え想いに寄り添い続けることが、在宅生活を支える上で大切であると鈴木さんから教えていただきました。

K A E D E N O K A Z E × C a r e p r o

K A E D E N O K A Z E ×

C a r e p r o



STORY 3

1. 訪問看護のストーリー

認知症でも最期の場所は決められる

KAEDENOKAZE × Carepro “STORY”

訪問看護利用者の年齢は病院と同じく、年々超高齢化が進んでいます。勿論認知症の方も多く、時に認知症だからとないがしろにされ支援が家族主導で動くこともあります。

私は訪問看護歴10年ですが、認知症の方の支援で忘れられないご利用者様がいます。

岡野さんは20年前に旦那さんを亡くし、庭の綺麗な一戸建てに一人で住んでおられました。キーパーソンである娘さんは遠方に嫁ぎ、嫁ぎ先での介護もあるため年に1回帰省する程度でした。訪問開始当初はある程度の記憶力や生活力はあったので、状態観察とリハビリなど

の支援をしていましたが、徐々に物忘れがひどくなり、内服も毎日ヘルパーさんの見守りが必要になりました。私に対しても「何しに来たの」という事も増えてきました。

徐々に持病である心不全も悪化し、息切れが増えてきました。そんなある日、岡野さんは「なんでこんな身体になってしまったのだろう」「夫は家で看取った。自分も家がいいけど子供に迷惑をかけられない」と話されました。私は今日の日にも分からない状況の岡野さんが、しっかりした口調でこんな気持ちを話されたことにハッとしました。

それから食事量も少しずつ減り、横になっている時間が増えていきました。息切れも強くなってきたため、ケアマネと私が入院について検討していると、その横で「病院には行きたくない」と、岡野さんははっきりとした口調で意思を述べられました。

遠方の娘さんに連絡したところ、以前帰省した時に「そろそろお迎えが来ると思う。でも家で死にたい」とお母さんが言って驚いたエピソードをお聞きました。娘さんからは「自分はすぐに帰れないけど、看護師やヘルパーさんにご協力をお願いし、最期まで家で過ごさせたいです」と言われました。

今まで関わっていたヘルパー含め、在宅医や訪問薬剤師、訪問入浴など関わる全ての人たちが集まりました。そこで、岡野さんの思いを共有し、在宅生活を支援し続けることになりました。

娘さんも遠方から頻繁に電話をされたり、私たちとメールで情報共有のやり取りをしたり、死亡後の遺体安置場所の準備をしたりと、できる範囲で精一杯、岡野さんの在宅生活を支えておられました。

相変わらず、毎回「どなた?」「何しにきたの?」など言われましたが、混乱する様子や苦痛の訴えはなく、穏やかに最期まで自宅で過ごされました。

認知症であっても意思を汲み取り、そして私たちはそれを支援する、なかなか上手くいきませんが、岡野さんの希望を叶えられた嬉しさが今でも忘れられません。



1. 訪問看護のストーリー

なにがなんでも家で暮らしたい

KAEDENOKAZE × Carepro “STORY”

訪問看護の依頼は、病院相談室や地域のケアマネジャー、診療所の医師や看護師、時にはご本人やご家族様からの直接電話もあります。

ある日、大学病院の相談員さんから80代の林さんというCOPD、脊柱管狭窄症の女性について相談の電話がありました。林さんは、CO2ナルコーシスで呼吸停止して緊急入院、現在は抜管されているが、終日酸素投与、夜間NPPVの装着が必要な状態で、腰痛により介助がないと起き上がりも難しく、退院願望が強いが無理なのではないかと思っている、とのことでした。電話だけでは判断が難しかったため、退院前カンファレンスの開

催を提案し、開催する事になりました。

退院前カンファレンスでは、医療者間で現状共有をしたあとに、御本人と話しました。近所の友達と話をするのが好きなのに酸素を一生付けなければならないため外出できないこと、NPPVの着脱を自分でできるか不安なことなど、林さんは涙を浮かべながら話されました。一方で、長く住んでいた家で過ごしたい、自分の家のベッドで寝たいという思いを強く話されました。病院でしかできない治療は全て終わっていること、そして何より、林さん自身が強く退院を望んでいることから、まずは退院する方針となりました。退院までの数日の間に、ケアマネ

ジャーさんと保険サービスの導入について、打ち合わせをしました。

退院日当日、林さんの家にお伺いしました。食事やトイレなど、生活の動線を意識してNPPVや在宅酸素機器を配置し、それからマスクの着脱を練習しました。訪問看護ステーションは24時間連絡がつくこと、相談でもいいから困ったら必ず電話して欲しいことを念を押して説明し退室しました。

その夜、NPPVの装着ができずパニックになった林さんから、緊急コールが鳴りました。すぐに訪問した所、マスクを手に持ってベッドに座っていました。装着を手伝い、外し方を練習して、翌朝また来る事を約束して退室しました。翌朝訪問時「あの後はぐっすり眠れたよ、来てくれてありがとうね」と林さんは満面の笑みで言いました。

サービスを利用しながら、食事や入浴など、少しずつ林さんの望んだ在宅生活を送る事が出来るようになりました。病院では自力での歩行は困難でしたが、積極的な疼痛コントロールや林さんのリハビリの頑張りで、徐々に自立して動けるようになっていきました。活動量が上がるにつれ、酸素化も改善し、日中は酸素なしで生活出来るようになりました。

今は、本人の「家の外へ散歩に行きたい」という希望に沿ってリハビリを計画しています。



最期までつきあう

やるも看護
やらぬも看護

“わたしの
フィロソフィー。”

本人の決断に
向き合う決意

疾患や生活に
合わせた関わり

本人 家族で
生活を送れるよう
自立を促す支援

一歩ふみこんで“聞く”

ひきうける

Philosophy

KAEDENOKAZE x Carepro “Philosophy”

訪問看護の数だけ、フィロソフィーがある。

そのままでもいい

理想と現実の双方に
目を向ける。

本人・家族の
大切な事を
大切にす

相手の立場に寄り添う

医療者としてではなく
1人の人間としての関わり

看護師かつ
人間としての
支援

ゆだねる

生活の中に
治療やケアを入れる

本人と家族の関係を
察知する 理解する



KAEDENOKAZE × Carepro

訪問看護の現場から。
SPECIAL SYMPOSIUM

YANO&FURUYA&UCHIDA&KIMURA

3. 座談会



楓の風、そしてケアプロの訪問看護の現場で働くスタッフに、訪問看護師としての魅力を話し合っていました。

K A E D E N O K A Z E × C a r e p r o

訪問看護へのチャレンジを決めた理由は？

矢野 私は、10年間社会人を経験して看護師になりました。配属先は、がん病棟で、化学療法から終末期までの看護をしていました。家に帰りたいと言う患者さんは多かったのですが、タイミングを逃し帰れない方が殆どでした。ある患者さんに「おんぶをして家に帰してほしい」と言われたことがきっかけで『在宅で過ごしたいを支えたい』と訪問看護に興味をもちました。

内田 私は、ホスピスで働きたいと思い看護師になりました。病院で働く中で、白い壁

に囲まれた場所で最期を過ごすことに違和感を覚えました。その頃、ケアプロのスタッフに出会い、家での穏やかで当たり前の生活を送っている利用者さんの様子を見て、訪問看護に興味をもち転職を決めました。

古屋 私は、母親をがんで看取りました。母が病院から退院するとき、バルーンカテーテルなどが入っていたので、訪問看護を利用したいと退院調整の方に相談しましたが、「利用できない」と言われました。私は知識がなく、「そうなのか」と引き下がり、2ヶ月間家族で介護し、母は病院で息を引



矢野さん

看護師歴:4年目/訪問看護師歴:3ヶ月/所属:楓の風

人と人として、利用者さんの役割を支えられるのが訪問看護の魅力だと思います。

き取りました。その後院内研修の一環で退院支援を学び「どうしてあの時できなかったのか」と悔しく、自分のように知識がなく困っている人を助けたいと思い訪問看護にチャレンジしました。

木村 私は、先輩のいる救命救急センターに希望し就職しました。そこに運ばれてくる患者さんの中には、在宅で医療者が関わっている方も多くいましたが、どうして運ばれてきたのか疑問に思うことがありました。また、人工呼吸器のまま自宅に退院する患者さんもいて、その後の「在宅」での生活や療養に興味をもち、訪問看護の世界に飛び込みました。



古屋さん

看護師歴:6年目/訪問看護師歴:3ヶ月/所属:楓の風

在宅では、家族の思いをしっかりと聞けるのが魅力だと感じています。

実際に訪問看護をはじめたのですか？

古屋 母を介護していた時に、家族の手技に不安になる事があったのですが、今は在宅療養の実際を知って、「あれで良かったんだ」と思うようになりました。

木村 病院では単純な思考になりがちでしたが、在宅では視野を広くもたないといけないことを実感しています。潜在的な二



内田さん

看護師歴:7年目/訪問看護師歴:4年目/所属:ケアプロ

「もうちょっと病院で頑張ろう」だったのが「帰ってきていいよ」と言える今がとても嬉しいです。

ズをどう引き出すのが難しいです。

矢野 入社して3ヶ月で3人のお看取りを経験しました。病棟では、『家に帰りたい』をどうすればいいのか』に悩んでいましたが、訪問看護師になって、『家に帰れた人』をどう支えればいいのか』を考え、その難しさを感じています。

内田 家に帰ると、状態が安定する方がいます。病院であと1ヶ月と言われたのが1年過ぎた方もいました。家の力、家族の力、孫の力、ペットの力を感じます。病棟だと「もうちょっと病院で頑張ろう」だったのが「帰ってきていいよ」と言える今がとても嬉しいです。

病棟や診療所などに勤めている看護師さんにメッセージをお願いします。

古屋 病院では、治療がメインでなかなか家族の思いをきく時間が取れませんでした。在宅では家族の思いをしっかりと聞けるのが魅力だと感じています。本人や家族と同じ方向を向いてケアすることが出

来、とても楽しく仕事できています。

木村 訪問看護は一人で訪問して、全て判断しなければいけないため不安がありましたが、いつでも相談できる体制があることや、笑顔で看護師を迎えてくれる利用者さんのおかげで、今では楽しく訪問出来ています。

矢野 利用者さんは父親・母親・自治会長など、生活や地域の中で役割を持っています。患者と看護師ではなく、人と人として、利用者さんの役割を支えられるのが訪問看護の魅力だと思います。

内田 訪問看護師が、利用者さんの願いをすべて叶えられるという事はないですが、寄り添い続けられる魅力があります。また、利用者さんや家族と一緒にケアを創る楽しさがあります。



木村さん

看護師歴:6年目/訪問看護師歴:3ヶ月/所属:ケアプロ

病院では単純な思考になりがちでしたが、在宅では視野を広くもたないといけないことを実感しています。



SPECIAL SYMPOSIUM

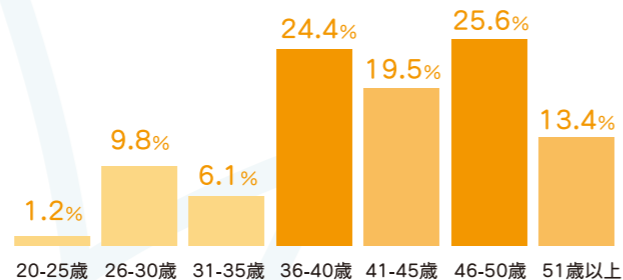
4. 訪問看護の現場で働くスタッフの特徴

男女比



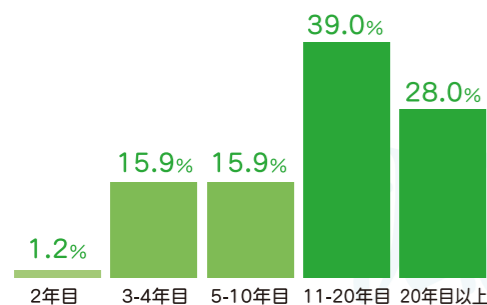
男性:8.5% 女性:91.5%

年齢

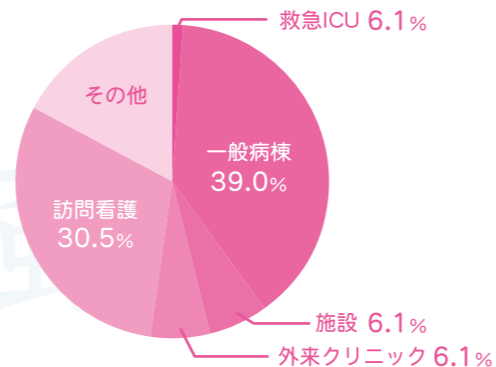


数字で見る 楓の風

経験年数



前の職場



※平成30年9月現在

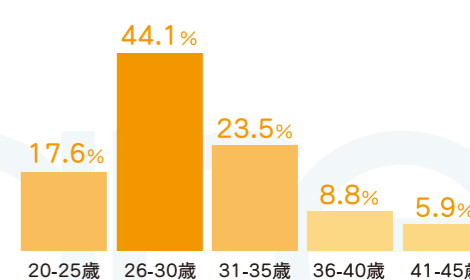
KAEDENOKAZE × Carepro

男女比



男性:38.2% 女性:61.8%

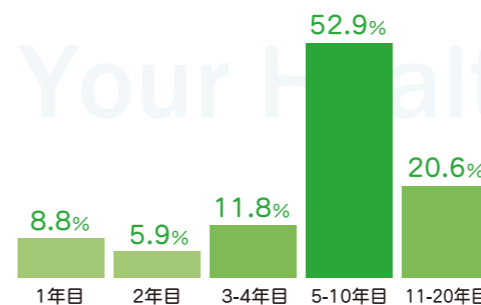
年齢



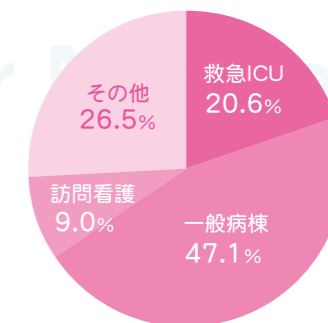
数字で見る Carepro

Your Health, Our Mission.

経験年数



前の職場



※平成30年9月現在

在宅療養支援

Total Rehabilitation & Nursing Service



私たち楓の風は、2007年の開設以来これまでに、
4000人以上の在宅療養生活をお手伝いさせていただきました。

そして約2000の方が、在宅での生活を続けられ、
ご自宅で最期を迎えられました。

私たちは、人には自力で最期を迎える力があること、
ご家族には、最期を見届ける力が備わっていること、

そして、そこには得難い幸せもあることを、
たくさんの方々の最期から教えていただきました。

だからこそ今、長寿の次に日本が目指すのは、
“幸せな終焉”であると考えています。



<http://houmonkango.or.jp>

最期は家で、
楽しく過ごそう





ケアプロは、
超高齢社会における在宅医療の課題を解決し、医療費の抑制や、
住み慣れた場所で最期まで過ごせる社会づくりに貢献します。

そのために、

1. 24時間365日、質の高いサービスの提供体制を実現します。
～誰もが自分の望んだ人生や生活が送れるように支援します～
2. スタッフが、やりがいをもって働き続けられる組織を実現します。
～新卒や若手、ベテラン、子育て世代など幅広いキャリア、ライフワークを実現します～
3. 地域包括ケアシステムの発展に寄与できる組織を実現します。
～地域の多職種と連携し、地域に根ざした組織を目指しています～

訪問看護がしたいという気持ちに、早いも遅いもありません。
ケアプロは、訪問看護がしたいというあなたを待っています。



<http://carepro.co.jp/recruit-zaitaku/>





楓の風

Carepro

Your Health, Our Mission.

